



漫 録



旅人西行の心境

長 谷 川 久 一

都會人くらい現實に執着する人間はない。即ち呪咀しながらもそれを忘れかねるといふ運命を有つて居るのである。西行法師も亦御多聞にもれぬ都會人である。彼はそれがため出生地の京都を忘れることが出来ずに旅へ出てもいつかは又京都へ歸つて來て居る。西行は殆ど全國に亘り足跡到らざるはなしといふ程山川を遊覽して歩いた。後世徳川時代に於ける芭蕉の旅人は實に西行を模範としたものであることは更に疑ふの餘地がないのである。

漂泊は實に詩人の天賦の運命であるとは謂へ、西行の遍

歴は非常な忍苦を要したから後世之れを偲ぶに畏敬の念を以てせざるを得ない。芭蕉の旅行がもとより今日のやうに樂なものではなかつたことは勿論であるから、況んやそれ昔に溯つた西行の漂浪旅行が如何に冒險的のものであつたか想像される。彼れが畢竟片意地な強い人間であつたればこそ爲し得たのだと謂へようと思ふ。そういへば彼は一箇の敬虔な修道僧であるかと問はれるかも知れないが、彼は決して文字通りの忠實な修道僧ではなかつた。この點に於ては吾人は鴨長明を憶ふのである。後者は西行と略々同

じ様な道を辿つた人であつたが、長明こそは慘愴たる現實の醜惡に眼をそむけ、來世の輝く希望を禁慾の上に築き上げんと努力した修道僧である。だから其の當時に於ける佛敎的生活の典型は西行ではなくて長明にそれを求むべきであらう。西行が墨染の法師ながら江口の里の青樓に立ち寄り歌の取りかはしから遂にそこに一夜宿泊したこと等も其の證據だとも謂へる。併し一層顯著な差異は、西行が幾度も旅先から京都へ戻つて來るといふ動機にあると思ふ。彼は果して何を求めに京都へ歸つたか。他なし彼は現實の野卑を心ゆくばかり呪咀せんがために歸つたのである。即ち彼は彼の悲觀論を一層明瞭ならしめんがために歸つた。この點が現實からいつも離れ去らんとした長明とは著しく異なる所であり、儀禮としての宗教は西行の安じて身を置くべき處ではなかつたことを示してゐる。

彼は一度出家した以上墨染の衣と巡禮者の笠と杖とを捨てなかつた。行爲の人として三十一文字以外に何物にも觸れなかつた。而かも頼朝から和歌の清談がしたいと請ぜら

れた時、

私の和歌は花月に對する感興の言葉たるに過ぎない、だから私は人に語るに足るべく奥旨といふものを知らぬ、強いて會談を求められるなら馬の道を語つて責を塞ぎたいといつたので、彼が純粹の詩人であつたことが知られるのである。凡そ偉大なる詩人にして漂泊の心を持たぬものは一人もない。渡り鳥のやうに、花を求めて花を失ひ、更に又他の花を求めて流轉する心、それは内から湧き出で來る寂しさが、遠心的興味として、詩人の生活に表現せられた場合であり、又偶然「ベアトリーチエ」に對して絶えず憧憬が注がれてゆくと、その心はやはり流轉であつても求心的興味として顯現する場合である。以上二つの場合に於て、その顯現に積極と消極、動的と靜的との差異あるが如くでありながら、その深奥に於ては双方が合一して居るのである。

ながむとて花にもいたくなれぬれば散るわかれこそかなしかりけれ

で花の散るとき、人と別れるときと同じ様に、愛惜と執着の念とが西行の心に残るのである。

こゝにまたわれ住みうくてわかれないは

松はひとりにならむとすらむ

この歌に於ても松は彼にとつては人と同じであつた。暫くの間は松と共に暮らすこともできるが、いつまでも自分として同じ處に留つてゐる譯に行かぬから、つらいけれども之れと別れるといふのである。而して月に向ふと彼は靜的、求心的になる、

かゝる世に影もかはらずすむ月を見る

わが身さへ恨めしきかた

しかも常に喜びと悲しみと、微笑と暗涙とを同時に有つて敢て矛盾しない。寂しがらずにはゐられぬ心は、詩人に與へられた運命であり、しかも寂しさを喜ぶことの出来るのも亦詩人の特權である。

とふ人も思ひたえたる山里のさびしさ

なくば住みうからまし

と西行はいふ。寂しさあればこそ住むにも堪え得る。詩人は寂しさに泣くのであるが同時に又その落とす涙を自ら喜ぶのである。云ひ換えると彼は悲觀を樂しみ、即ち涙を樂んで泣いて居る。現實世界の住むに堪え難きの感を十分に抱きながら、人慾の懊惱の卷たる京都をまた覗いて見たくなつて來る。久し振りで歸つて來て吃驚りするが、彼はこの陰氣な薄暗い雰圍氣のなかで微笑を禁じ得ない。彼は京都で武者振り若々しく、現實の野卑を呪咀しておいて、哀愁にとざされながらも、一種の快感に打たれては、又久しくは京都に留まることが出來難くなり、そこでやをら放浪の旅へと出掛けて行つてしまふ。かくて西行は合計一千數百里も旅をしたであらう。而かも東大寺再興の大勸進職を仰せつかつた俊乘房重源を助けるため、秀衡の喜捨を得んとして陸奥に下つたのと、崇徳上皇の御墓に參拜して其の御跡を懇ろに弔はむとして四國に赴いた二つの場合の外は、多くは欣求と憧憬との旅である。丁度ドイツの詩人ヘルデルリンが傷ついた戀を抱いて諸處を放浪して歩るいた

のと同じであつた。彼はみづから「絶望の日を追ふ憧憬の人」といふ。

彼の漂泊は實に淋しくあつた。人間の愛に傷ついて自然の懷に歸らうとする彼の佛は其の名詩「歸郷」に示されてゐる。彼は今戀する人に眼をそむけて故郷に歸る。故郷に歸る日は、即ち彼が青春と幸福とに別れる日であつた。故郷は而かも清く忍ぶ國であつた。戀はないがしかしその代はりになつかしい自然がある。そこにはイタリーからの使とも思はれる柔かい風がある。岸にはポプラのたちならぶ小川があり、連る山脈や日に輝ける峰が見える。故郷の天地を存分に抱擁して全身の愛を捧げ盡くす彼の心持は西行と略と同じである。唯後者は「櫻かざして今日も暮しつ」の遊惰な堂上人と日々耕戦するを能事とする武人階級の以外に一新境地を作つて住んだ强者の生活であつた。彼は山川草木を解脱の表徴として禮讚し、放浪の自然兒として永遠に新しい獨自の生活を選び自然により近く接觸する生活に人間本來の面目があり、眞實の詩歌がそこから生れると

なしたのである。されば此の見地に立てる旅人生活は即ち菩提の生活であり、單純な涙の享樂のみではない。實にその生活そのものが懺悔であり、そして其の懺悔が詩歌である點に於て模範的詩人生活とも云へるのである。一般に傳ふる如くに西行の出家が「長からむ心も知らず」の讀人待賢門院堀川に對する失戀を動機としたものであつたとするならば、ヘルデルリンの心境と相通するものがあるが、其の動機の如何は暫らく問はず要するに一月日は百代の過客にして行きかふ年も亦旅人なり」といふ芭蕉の冒頭の書き出しの如く年月を旅人と感ずる所に漂泊の眞の味をかみしめたのであつた。そも漂泊流轉の旅人は何を目的として歩み續けるのか、

大浪にひかれいでたる心地して助け舟

なき沖にゆるるゝ

でどこまで辿つても、どんなに求めても遂に何物も得られない。得られぬときに寂しさが一入湧いて来る。寂しさは詩人に與へられた悲しい運命である。寂しさは又此處に

も彼處にもある。此處より彼處へ、渡り鳥の如くに花を求めては其を失つて、又他の花を求めたり、落葉を尋ねたりして、行雲流水を友としながら一生の中五十年（西行は二十三歳にして出家して七十三にして没す）を一笠一杖に托し了つた彼は、聖フランシスよりもズツト長命であつた。後者は難行苦行と實際宗教の戦闘（鳥にまで説教したといふ）とで僅かに五十歳でもつて没したが、之に反し吾が西行が長命したのはどういふ譯であらうか。畢竟する、

世を捨てぬ心の中に闇こめて惑はむこ

とは君ひとりかは

と歌ひながらも唯悠悠々自個創造の別世界に住んだからであつた。彼は手に握つた武人としての赫々たる武功の彼岸に眼もくれず、將來といふものを一切かなぐりすて、自分で住むべき境地を絶えず開拓して行つたのであつた。だから彼はほんとうの宗教家とは云へないのであつて、眞の旅行者といふべきである。雲水流浪の歌道修行者そのものである。黒住左京の歌に、

身も我もすてんと思ふ心なるその心を
も捨てまほしさよ

とあるが、凡そ一番大切なのは無關心といふことであらう。善をなすに善をするといふ考のあるうちはほんとうの善ではなく、善と氣の付かない善でなければならぬのと同じく。

旅をすると考へて居る間は眞の旅ではなく、執着を去つて、理屈をぬきにし頭の中をいつも空虚にして置いて、何の考もない心が吾々を眞の意義に於ける旅人たらしめるのである。

願はくは花のもとにてわれ死なん

そのきさらぎの望月の頃

の西行の希望も亦果して幽契違ふことなく建久元年二月十六日三尊の來迎を眼に見ながら久遠の淨土へと旅び立つて行つた。一代の歌人俊成卿も哀悼措く所を知らず、

願ひ置きし花のもとにて終りみの蓮の

上もたがはざらなむ

と歌つて此の無束縛の旅人の死を悲しんだ。

自由の何物たるを味ふ是れ眞の旅行である。古今未曾有の獨舞臺に立ち詩の世界に彷徨する是れほんとうの散策である。俗塵を離れよ。現實世界を忘れよ。

歎けとて月やは物を思はするかこち顔

なる我が涙かな

道路に關することを

池 本 泰 兒

と歌つたとき月は西行にとつて悲しい戀人である、姉妹である。白雲の様に霞む春の櫻が眷々綿々たる戀愛の婦人となつて吾人の足をとどめしめ、或は又秋葉のうつろい易い其の琴線に少しでも日常の吾々を觸れしめ得べき國立公園道路の完成を飽くまでも翹望して已まないのは實に此の所以に外ならないのである。(四月二十四日稿)

街 路 掃 除

東京市は其の主要道路は殆んど舗装された。東京市の道路延長は一、三六六、〇〇〇米、其の面積は、一四、五五八、〇〇〇平米あるうちで舗装の出來たものが昭和六年三月調では八、〇九六、〇〇〇平米で總面積の五六%になつて居ると云ふ。舗装しなくてもいい様な露路を除くと現在

既に八〇%の舗装が完成してゐると云はれてゐる。

今東京市を歩いて見ても殆んど舗装し盡されてゐる様な氣がする。さすがに帝都だと思ふ。次第に舗装が完了されて來ると次には其の維持修繕と掃除とが重要な仕事になつて來る。實際東京市の街路は何時も美しく掃除されてゐる。廣告ビラ、紙屑、街路樹の葉などおびただしい量であらうにそれが全くよく掃除されてゐる。町を歩いて見て